

9月初め、枝先に6花開花した。花は鮮やかなオレンジ色で長さ2cmと小ぶり。花冠は5裂し、上部2裂片の外側に2本のはっきりした深赤色の筋がはいり、下部3裂片は花冠付近ははっきり筋がはいるが、萼に向かうに従い薄くなる。また、弁先も縁に沿って深赤色を呈し、長短2本ずつの雄ずいがある。花冠の下部3裂片の内側には、深赤色の斑点が1つずつある。9月中旬には開花を終了した。現在は最低気温18℃のガラス温室で管理している。

他の株は開花に至らず、同一種か確認できていない。

〈参考文献〉

Hilliard, O.M. and Burtt, B.L. 1971. STREPTOCARPUS. University of Natal Press.

Virginie F. and George A. Elbert 1984. The Miracle Houseplants. Crown.

呉征鎰主編 1986. 雲南の植物. 中国雲南人民出版社.

園芸植物大事典. 小学館.

Bailey, L.H. 1976. Hortus Third. Cornell University.

Royal Botanical Garden, Godawari. 1975.

ブドウガメの開花・結実について

濱谷 修一・西山 岩平

ブドウガメ (*Cissus juttae* Dinter & Gilg ex Gilg & M.Brandt) はナミビア原産のブドウ科の多肉植物である。当園ではサボテン温室内で植栽展示しているが、当園としてはこの度初めての開花を確認した。本種の開花は珍しいものではないが、果実の糖度などを調査したので、報告する。

栽培環境

例年、春から秋にかけてはかなり多く水を与え、冬にはかん水を控えている。温度は最低10℃で管理し、最高は25℃を越えると天窓が開くように設定している。寒冷紗等による遮光はしていないが、南側にブルメリアが植栽されているため、太陽の方角によっては若干光が遮られることがある。

本年(1997年)は、6月上旬にサボテン温室内の土壌の入替を行い、本種もその影響を受けている。現在は焼き赤玉(小粒)、日向土(小粒)、盆栽砂の等量混合土に植えられている。

開花・結実

1997年9月上旬に、開花後の花序を確認した。この時、幹回りが32cm、地際から茎の先端までの長さは95cm、茎の太い部分の長さは60cmであった。

その後、果実が1個結実し、10月28日の時点では長径2cm、短径1.5cmまで成長した(写真1)。果実は12月1日に手で触ると落下した。落下時の色はかき色であった。

果実はブドウと同様に、薄い表皮の内側に多汁質の果肉がある液果で(写真2)、果肉の中に種子を1個持っていた。落果時の果肉の糖度(アタゴ手持ち屈折計N1により測定)は8.8%であった。果肉をかじってみると甘柿に似た味がした。飲み込まなかったが、後で少しのどが乾く感じがした。

種子は長さが約1cmで、よく見ると半透明のゼリー状の組織で覆われており(写真3)、表面をボールペンの先でつつくと弾力があった。

本種は肥大した茎が主な観賞の対象となるが、果実も美しいので、うまく房状に結実させることができれば好評を得ると期待される。

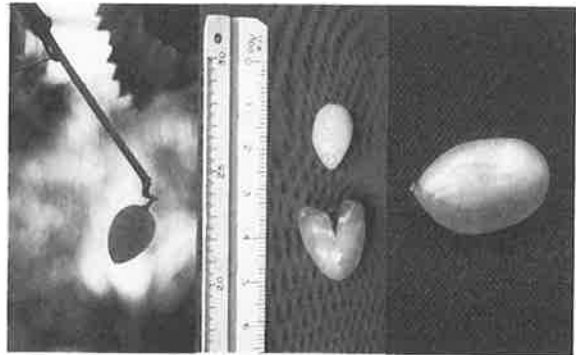


写真1. 結実中の花序 写真2. 果実から果肉を 写真3. 種子
取り出したところ